

リスクアセスメントの本来の目的をお忘れなく

こちらは、英文記事「[Don't forget the real purpose of risk assessments](#)」（2020年5月27日付）の和訳です。



リスクアセスメントを煩雑なものにして、本来の目的を忘れてしまっていることがよくあります。

作業員である乗組員に対して十分な情報を提供したり、安全衛生や健康に対するリスクを周知徹底することよりも、提出や監査用にリスク評価書を完成させることなどを優先していませんか。こうした姿勢ではリスクアセスメントの意味が薄れてしまいます。

1つ事例を挙げましょう。空のガスボンベを突堤に降ろすために、後部甲板から船の中央辺りまで運搬する作業が予定されていました。新人船員1人と甲板員1人が、作業担当として割り当てられましたが、ブリーフィングは受けていませんでした。作業は午前中に一等航海士が計画し、リスクアセスメントも済み、リスク評価書も提出済みでした。作業担当となった2人は、手でガスボンベを持ち上げることが体力的に厳しいことに気付いていましたが、計画どおり作業を続けました。甲板上の障害物の1つを避けようとした際、2人の手からボンベが甲板に落下し、ボンベのバルブが開いてしまいました。ボンベには微量のガス圧が残っていたものの、幸い、激しい反応を起こすほどではありませんでした。後日、甲板員が背中への痛みを訴え、その症状は数か月続きました。提出されていたリスク

評価書には、同作業に少なくとも上席の船員 1 人を割り当てることや、ポンベの運搬にカート等の道具の使用を検討すること、安全キャップが外れた状態でポンベを運搬しないこと、補助具を使わずに手だけでポンベを持ち上げたりすると背部に重傷を負うリスクがあることなど、事故の発生を防げた可能性のあるポイントが複数記載されていました。

リスク評価書の情報を乗組員に伝え、危険や予防策を周知するのにそれほど時間はかかりません。上記の事例では、作業を担当する乗組員とツールボックストーク（安全会議）を行って作業内容を確認するのに数分もかからなかったはずです。実際に作業を担当する乗組員をリスクアセスメントプロセスに参加させることが推奨されています。この点については [Code of Safe Working Practices \(商船船員の安全な労働慣行の規範\)](#)（2015 年版 – 2019 年 10 月 改訂 4 版）でも強調されており、「ツールボックストークを行うときは、作業の実施者や危険にさらされる可能性のある者を積極的に参加させることが重要である」と記されています。

他にも、作業現場を巡回したり、乗組員を危険や予防策を話し合う場に参加させることでリスクアセスメントプロセスを一層意味あるものにできる可能性があります。こうした取り組みは、乗組員の安全マインドを養い、作業環境に対する高い意識を維持することに役立つでしょう。

Gard では、本トピックに関連したポスターを作成しています。船員の皆さんがそれを活用して、作業の中で気付いた様々な危険や、その予防策に関する話し合いに参加するようになることを期待しています。最後に、船員の皆さんは、さらに一歩進んで、「リスクアセスメントをより意味のあるものにする方法」についても考えるようにしてください。

追加資料

損失防止ポスター [Risk assessment is a mindset, not just a piece of paper \(リスクアセスメントは、物の考え方であり、単なる紙切れではありません\)](#)

本情報は一般的な情報提供のみを目的としています。発行時において提供する情報の正確性および品質の保証には細心の注意を払っていますが、Gard は本情報に依拠することによって生じるいかなる種類の損失または損害に対して一切の責任を負いません。

本情報は日本のメンバー、クライアントおよびその他の利害関係者に対するサービスの一環として、ガードジャパン株式会社により英文から和文に翻訳されております。翻訳の正確性については十分な注意をしておりますが、翻訳された和文は参考上のものであり、すべての点において原文である英文の完全な翻訳であることを証するものではありません。したがって、ガードジャパン株式会社は、原文との内容の不一致については、一切責任を負いません。翻訳文についてご不明な点などありましたらガードジャパン株式会社までご連絡ください。